

# 武良茂とヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ

鎌野 多美子\*

## Shigeru Mura and Johann Wolfgang von Goethe

Tamiko Kamano\*

### Abstract

Shigeru Mizuki said that he was 80 percent Goethe and that Goethe was the only person he could respect. Mizuki was a cartoonist of the baby-boom generation whose major creative works were *Kitaro in the Cemetery* and *Sanpei the Kappa*, and Goethe is the famous German writer. This article addresses the connection between the greatest German writer and the Japanese *yokai* cartoonist who captivated the minds of post-war children.

The author compares the relationship between Mizuki and Goethe, who became the former's mental support, with those of Johann Eckermann who wrote about Goethe, and Eishiro Kameo who translated Goethe into Japanese.

### キーワード

水木しげる、武良茂、ゲーテ、エッカーマン、亀尾英四郎

### はじめに

「水木サンの80パーセントはゲーテです<sup>1</sup>」「人物で尊敬するのはゲーテだけなんです<sup>2</sup>」という言葉に、少なからずゲーテを研究してきた筆者は、「日本人妖怪漫画家とドイツ文豪ゲーテ」と一体どのようなつながりがあるのだろうと思った。団塊世代には水木しげるは紙芝居（のち貸本屋）の『墓場の鬼太郎』『河童の三平』で、ゲーテは健全なドイツ文豪である。この二人に何の関係があらうか。紙芝居への懐かしさも手伝って、戦後時代のこどもたちの心を捕えた鬼太郎作家の背後を探ることにする。

また、精神的支えとなったゲーテと、ゲーテを伝えたエッカーマンと、そしてそれを邦訳した亀尾との、武良茂の関係を考察してみよう。

### 一 武良茂のゲーテとの出会い

武良茂がゲーテを知ったのは『学生と読書<sup>3</sup>』による。そこに、必読書として「神保光

---

\*かまの たみこ：大阪国際大学現代社会学部教授〈2016.7.8受理〉

太郎譯『ゲーテ對話の書』（二巻）〔後述〕があげられていた。「この本を買って読んでみると、はなはだ親しみやすく、人間とはこういうものであろうという感じがする。それで、ゲーテに関心を持ち、『ファウスト』や『ウィルヘルム・マイステル』や『イタリア紀行』を読んだが、『ファウスト』は何回くりかえしてみてもわからなかった。僕には、むしろ、ゲーテ本人が面白く、だから、『ゲーテとの対話』が好きなのだ<sup>4</sup>」と述べている。

ヨーロッパ古典の知識と教養を必要とする『ファウスト』は理解できなかったのは無理もない。そもそもそれは人生経験に乏しい青年が、出征までの短期間に読破できる代物ではない。武良茂だからできなかったのでは決していない。

だが、ここで筆者が気になるのは、『学生と読書』の中で推奨されていたのは神保光太郎の『ゲーテ對話の書』（二巻）（改造社）であるのに、彼は、なぜ、亀尾英四郎訳の『ゲーテとの対話』（岩波書店）を購入したのか。

その推薦図書（改造社）は昭和十一年から十二年の発行、『学生と読書』は昭和十三年十二月の発行であるから、神保訳が紹介されたのは分かる。武良がゲーテを知ったのは「年齢も二十歳に近づき、戦争もきびしくなってきた<sup>5</sup>」頃の昭和十六年だから、紹介された必読書は、店頭になかったのか。それとも、故意に、彼は同郷人亀尾英四郎を選んだのか。

### （1）学生と読書

序文は「事變が満二年に入り時局の重大性が益々加はるに従って學生諸君も亦怒濤の脚下に逆巻くの感を覚えるであらう」で始まるが、武良の胸中も同じだった。

出征に備えて心の準備を促し、学生本分の全うを勧告し、「次代の日本は今までとは異なる重き負担を諸君の双肩に置くであろう、之を負担しうるか否かは、一に現在の學生生活をいかに送るかに係っている（中略）此の時代に書を愛することを知らないならば、生涯を通じて読書から遠ざかることにならう」と、読書を勧めている。

この「必読書目<sup>6</sup>」の「第五 傳記」では「神保光太郎譯『ゲーテ對話の書』二巻 改造社」「茅野爾々『ゲョエテ研究』第一書房」「木村謹治『若きゲーテ研究』弘文堂」が、「第七 文學」では「森鷗外譯『ファウスト』二巻 岩波文庫」「林久男譯『キルヘルム・マイスター』二巻 岩波文庫」「小牧健夫『誌と眞実』三巻 改造社」、さらに「附録 統計にあらわれた現代學生の讀書傾向<sup>7</sup>」では、あらゆる箇所でもゲーテの名と作品が挙げられている。

「読書の回顧<sup>8</sup>」の章では、高橋健二が「私自身にも人格的に最も大きなものを與えてくれたのは傳記である」と伝記の読書を勧め、「ことにゲーテの傳記は萬人必讀」であると断言し、ゲーテの抒情詩をはじめ、森鷗外訳の『ギョエテ傳』やビルショウスキーの『ゲーテ』また「若きヴェルテルの悩み」「ファウスト」「誌と眞実」「ヴィルヘルム・マイスターの修業時代」「狐ライネケ」から「ゲーテとの対話」に至るまで、彼自身の研究分野も手伝ってドイツ文学・教養文学の読書を推奨している。

「如何に讀書すべきか<sup>9</sup>」では、木村健康が「重要な個所、感銘深い文字にアンダーラインを附すること」や重要箇所は抜粋することを推奨している。水木が、ゲーテの言葉を

半紙に書き写し、家の柱や壁に貼っていたのも、愛読書に赤線がぎっしり引いていたのも、木村の教えである。

## (2) ゲーテに出会うまで

戦争勃発までは「ねぼけ人生」をおくっていたという彼は、大正ロマンの色濃く残る幼少期を過ごし、平和の幸福を肌で感じとっていた時代を継承し生きるのがたのしい当時の少年の一般像である。

彼が『ゲーテとの対話』を知ったのは十代の終わり頃、頻繁に読んだのは二十代、三十代で、それ以降はあまり読まなかった。十代終わりから二十代前半は彼にとって精神的に最も苦しかった、二十代後半から三十代は物質的に最も苦しかった時代である。

十代終わりは、第二次世界大戦の始まりである。昭和十六（一九四一）年十二月八日朝、ラジオから流れくる軍艦マーチの理由を母親に尋ね、戦争開始——真珠湾攻撃、太平洋戦争の始まり——を知った「この時から、僕の灰色の人生が始まる<sup>10</sup>」と述べているように、十九歳の彼には、戦争の始まりは出征を意味していた。人生について真摯に考えるのは自然の成り行きである。

乙種合格で補充兵役に編入とはいえ、戦争激化の時世では入営は間違いなくあると思う恐怖心をもって当然のこと。「出征すれば間違いなく死ぬ」と思っていた武良は「ここへ来て、死がせまっていることを考えるのは、非常につらいことだった<sup>11</sup>」ので、死への恐怖を前にして、死ぬ意味について考え、人生とは何だろうと問いはじめた。こたえを得るために「必読書目」に挙げられていた二四三冊すべてとまではいかないにしても、片っ端から我武者羅に哲学書や宗教書にいたるまで、新約聖書は暗記するほどにまで読んだ<sup>12</sup>。

激戦地では読書の暇などなかっただろうが、雑嚢にいれただけかもしれないが、紛失せずにもって帰還したことは、彼にとって如何にゲーテが重要だったかを語っている。

そして最終的に、死の恐怖までは取り除くことはできないにしても、人生とは人間とは何だろうという疑問に応じてくれたのが、「生死について当時抱えていた疑問にすべて答えてくれる感じだった<sup>13</sup>」のが、ゲーテだった。生きていく上の基準が『ゲーテとの対話』には満載されていたという。

昭和十八年、夜間中学三年生の時、召集令状は届き、中学中退「ムシ歯をなおし、眼鏡を余分に二つ作って」本籍地のある鳥取連隊に、「デッサン用の紙と鉛筆」と「岩波文庫で上中下三冊を雑嚢に入れて<sup>14</sup>」入営した。

## (3) 出征前の手記<sup>15</sup>

「死ぬ意味について出征直前まで考え続けても答えは見つからず<sup>16</sup>」恐怖克服のために、戦死に納得しない魂の救済のために、葛藤する青年の心情が、原稿用紙にして三十八枚ほどの手記にみてとれる。

昭和十七年十月（二十歳と七ヶ月）から十一月七日夜記に至る約一ヶ月間の手記は、彼の叫びである。臨時召集の令状がきたのは昭和十八（一九四三）年四月（二十一歳一ヶ月）だから、その半年前に書かれたものである。

「静かな夜、書取のペンの音が響く。その背後には静かな夜のように死が横たわっている。この心細さよ」で始まる。次の行には「二日 [昭和十七年十月]」とあり、「自我を否定する時は今だ」「思ふに日常、又は一生に起る苦痛もイエス以上ではあるまい。如何なる苦痛もイエスの事を思ったら、何一つとして耐えられぬものはないと思ふ」と死を覚悟しようとしている。「ニイチエは偉大なものだ。いつ読んでも感心させられてしまう」「世界は俺が居らなくても完全だ」、五日には「いじけるな、自分を小さくするな」、六日には「将来は語れない時代だ」「画家だろうと哲学者だろうと文学者だろうと労働者だろうと、土色一色にぬられて死場へ送られる時代だ。人を一塊の土くれにする時代だ」「暴力だ、権力だ。そして死んでしまう事だ。それが一番安心のできる生き方だ。(中略)泣く余裕もない。青ざめて戦ふ事だ。勝つことだ(之は国家の事でなく個人の事だ)」と、戦争は誰彼なしに死に追いやってしまう権力の暴力行為だと、やり場のない怒りをぶちまけている。「将来は語れない。考えられない。(中略)過去も未来もない」と、戦争に雁字搦めになっている。

この枷から自己を解放するために、「現在を唯戦ふ時代だ」と言い聞かせはするが、結論を見出せない。そこで、「もう俺を苦しめるな。時代だ、運命だ。自己を、凡てを捨てて、死にながらにして生きるのだ。(中略)一切の自分ていふものを捨てるのだ」と社会の風潮に同化しようとする。そして「一個の人間に之程大きな支払いはない。時代と言ふ怪物はこんなに払わなければ生かさない」と嘆きながらも落ち着く。

この、時代になびくと決めた決意も「漱石の書簡の中にこんなものがある。人生観、世界観は常に変わるものだよ。之は痛い、又不安になった」と揺らぐ。二転三転する自分を「俺なる実在は、俺の思考がとうてい及びもつかない程、複雑怪奇だ」と決めつけ、「漱石書簡集を読む」。が、人心は常に変わるという漱石に対抗できるだけの自分がなく「漱石等とは時代が違ふさ」と嘯くことで、不安を紛らわしている。

一方で「しかし絵をやりようと思えば不安になる」と自分の好きな道に絶対的確信を持たず、理論で死を克服しようと「兎に角哲学を離れたら不安になる。不安が生じてくると、恥さらしに生きているような気になる。そして自信がなくなる」と吐露し、哲学に頼ろうとニイチエやショーペンハウアーやカントを読んだ。十一日には「絵描きになるか何になるか知らないが兎に角兵役が終わってからの事である——二ヶ月のいのち——」と、すべては戦争を生き延びてからの事と言いながらも、二ヶ月くらいで赤紙がきて、出征して間違いなく死ぬと脅えている。

「芸術品を造るものは何よりも人にならねばならぬ。とはゲーテの語であるがもっともだ」と納得、この苦難時代は自分という人間をつくるのだと教えられ、「吾は世界一の画家たるの資格をそなえむ」とゲーテに学ぼうとするも、すぐに「(中略)意気もなし。(中略)知識なく、(中略)勇氣もなし。(中略)金剛力は無論なし。(中略)胆力と金がない。と言って勉強するでもなし運動するでもない」と自己否定に陥り「一体この男はどうなるのだ。八つ九つに引きさけるぞ」と迷宮に嵌まり込んでいる。

そして十三日には「吾を救ふものは、道徳か、哲学か、基督教か、仏教か、而してまよふた」と、いかにして恐怖から救われようかと模索している。出征はまちかと思っている

武良は「道徳は死に対して強くなるまでは日月がかかり、哲学は広すぎる」と愚痴り、死の意味を考察したいのに「芸術は死に無関心である」ので「而して基督教か仏教かが我を救うと思へり」「仏教にせんと思ふ」と慣れ親しんだ仏教にすがろうとする。そして「人間が不安を克服したならば、それだけ偉大と称するにたる」と恐怖克服の難しさを告白している。「命を捨てずば命を得ず」「世は皆無常なり。会えば必ず離ることあり。憂悩を懐くこと勿れ、世相是の如し。(中略) 精進して早く解脱を求め、智慧の明を以て諸の痴暗を滅すべき。世は実に危脆、牢強なるものなし」と、「釈迦の名文だ」と言いながら仏教に救いを求める。

そうかと思えば「新約の十字架の場面を読む。大いに感激す」と迷う。また「老人も死ぬのはおしい。青年と同じ瞬間に生っているが故に生そのものからみではおなじだからである」と命の平等性を述べ、自分に限らず誰もが死ぬのは嫌だという。「生も瞬間死も瞬間だ」と自分の誕生の瞬間を個人は憶えていないのと同じように死ぬ瞬間も知らないと思ったかのようなのだが、まだまだ迷いの中にいる。

彼は新約聖書に感激しても、基督教の神の存在には馴染めなかったので、「基督教もよかれど神ありて急に信ずるあたはず」と、のこる時間では基督教を信心できるところまでたどり着かない。そして「仏よ 基督教に行かんとする心を閉ざせ。哲学に行かんとする心を閉ざせ。芸術に入らんとする道を切れ」と他力本願、挙句の果てに「理屈はもういい。吾は意を決して仏教に入らむ 入らむ」と半ば強制的に決心した。とはいえ、十五日には「仏教の語句の難ヶ敷いのは驚く。之を知るだけで一年や二年はたつ」と気を変え、十六日には「久しぶりで散歩して、風景に感激した」ので画家になると嘯いて遊んでいるように思える。それでも「こんな生活は遊んでいるようでも少しも無駄がないのだ。遊んでいるようにみえて生死の戦いをやっているのだ」という。

「現在と言ふ現実をみれば、どんな将来の希望もふつ飛んでしまふ。だからこんな時代に自己にとどまって反省などと言ふような事をしていれば不安で仕方がない。時代に順ずるものが幸福だ。現実をみよ。個人の理想何んと言ふものは、いられるものではない。恐ろしい時代だ。四方八方に死が活躍する。こんな時代には個人に死んでしまふ事だ。そうでない限り、不安で不安で仕方がない。キリストやゲーテの時代をみるな。又彼らの語に従ふな。それより現実をみよ。ヤケニなる事が救ひだ」とますます動揺している。

そして十七日には「頭は内乱だ。朝から一時まで本屋を歩き廻った」「吾れ 二十一歳<sup>17</sup>の十月十七日を以て一生の目的を立つ」「この不安混乱は一体何者の仕業か」「俺の心が俺を苦しめるは、一体心は誰のものじゃ。俺には解らぬわ」と錯乱しながらも「今は静の時代ではなく動の時代だ。人間の幸福は時代に成りきる事が必要だ」と、ここでも時代に同化することを言い聞かせている。

新約聖書とキリスト、ニイチエと漱石、ハムレットや釈迦と、多くの名が出てきて、あれやこれやと論じている。「思ったり感じたり書いたりするが、事実にはならぬものだ。思ふだけで一つも行為にならないが「人と生まれた以上は自分と言ふものを持たなくてはなるまい」と、「仏陀の大慈も キリストの大愛も 固くこぼめばこそ心細き この不安」を抱きながらも、十八日には自分自身と正面切って戦い始めている。

「無名であれ何であれ、自らの力を出しつくして死んだものは偉大だ」と悟り、「つまらないやつじゃ。言ふだけは言っても陰ではその反対だ。(中略) やると言ってもやらぬ、少し困難があれば方針を変へるとか言ふ。馬鹿な。やらねばならぬ事、やれるだけの事をやらずにおいて何を言ふのか。嘘つき。形ばかりだ。魂がない」と自己分析、「嘘 嘘の山だ」「義務は少しも行なわぬ。人をあなどり、己を高しとして影でなまける (中略) 資格のないくせに、それを行ふのは過分だ。(中略) 善よりも悪の大きい過去、嘘だらけの過去、だのに身は依然として存在する。之は過分の恵みだ」と、それまでの年月を猛烈に反省。「唯心細さと不安の中に呼吸する」「なにくそ どんなに心細ても、どんなに不安でも己の道を進むぞ、周囲の囲いを破るのだ。馬鹿 馬鹿たれ 馬鹿野郎」と自己確立のために奮い立たせている。

そして「この、めんどろな人間てえやつを、一つの機械としてみてはどうか。情熱なんてのは問題にせず、何々せよとあてがつて。どうだらう、そうするのが一番いいと思ふ」と自分を客体化し始めた。それ以降手記の音調が変わった。

十九日は「ソクラテスは知識は徳だと言った。その通りだ」、二十日には「死ぬまで活動すると言ふゲーテのそれには感心する」そして二十一日には「真理のために狂人となりしニイチエ。真理のために正に餓死せんとした釈迦。真理のために十字架についた基督。真理を求むもの、死、親の愛、世の義理に關はる事なかれ。さなくば 真理は語られじ」と落ち着き、二十二日には仏教やキリスト教について考察し、二十三日には「おれの考えている事は他の人間が考えている」、二十五日には「正直になるんだ。つまらぬくせに、何を誇るか。内容は空じゃないか」「どうかもう少し人間らしくなってもらわんと水母のようにふわふわして困る、内容を造るんだ、内は空だ」と自分を客観視することは失っていない。

やっと二十六日に「読書は吾を救ふてくれた。世に文字なかりせば、吾は今頃如何なるものとなっていたか。思えば読書は恩人である。教師である。吾に於いては、正に唯一の教師であった。否、教師でありつつある」と言っている。読書の真の成果が出てきたのかもしれない。

しかしここで「このように物が面白くなくなり不安になるのは、物事をよく考えなかったからではないだらうか」と過去を振り返り、これは「一に怠惰に帰すべきではないだらうか」とそれまでの怠惰を反省し「生とは活動である。死とは休止である」というところにいきつき、「生ある限り戦ふ事だ」「あの世に行くまで働かねばならぬ」という結論に達した。そして二十七日からこの手記の終わりの十一月七日までは「怠惰」の猛反省である。

手記の最後は「武良茂は嘘つきの悪人じゃ、馬鹿者だ。こんなことでは自殺したって土が喜ばぬ。生きていたって空気が喜ばぬ。寝ていては夜が喜ばぬ。死んだとて、死ぬ資格はない。地上がけられる」と自殺を考えたことを仄めかしているだけでなく、自暴自棄になっているが、一転して「幾萬と重なる罪業の負債を、生ある限りをつくして支払ふならば死ぬ資格もあらう」と、出征して死んだとて、その日まで活動していれば、悔いはないという境地に達した。

肉体は減びようとも「われわれの精神は、絶対に減びることのない存在、永遠から永遠に向かって生き続けていく存在だ<sup>18</sup>」というゲーテの考え方が、「どんな状態にも、どの瞬間にも、無限の価値がある<sup>19</sup>」ので死ぬまで活動しなければならぬというゲーテの考え方が教訓になったのかもしれない。

#### (4) 邦訳『ゲーテとの対話』と亀尾英四郎

水木しげるで『ゲーテとの対話』に触れる時、彼の愛読した旧仮名遣いの亀尾英四郎訳では平成の世では理解し難いという理由で、山下肇<sup>20</sup>のもので代用される。が、それは極力避けたい。

なぜなら、目には映らぬ、感じるものを描くことを飯の種としてきた「水木サン<sup>21</sup>の80パーセントはゲーテです」と本人が言っている以上、河合栄次郎が神保光太郎<sup>21</sup>を推奨しているにもかかわらず、武良はそれを手にすることなく、亀尾英四郎訳を購入したからである。したがって、彼にゲーテを初めて贈呈したのは亀尾ということになる。そこが水木流「何か」を感じさせる。

二人は同郷人、亀尾は明治二十八（一八九五）年三月に米子で生まれて昭和二十年十月に東京で死去、武良は大正十一年三月に大阪で生まれ（生後境港へ）平成二十七年十一月に東京で死去。両者ともに三月生まれの十一月死去、出身地は米子と境港で地理的に近い、気質的にはこと食に対しては正反対の鳥取県民である。

戦後の食糧難時、亀尾は自分を含め妻と子六人の食生活を配給物だけにたよった。それだけでは食べ盛りの子どもには足りず、かれ当分の配給も子どもに食べさせたので、結果彼は栄養失調で死んだ。彼の死は十月二十八日付毎日新聞に記載された<sup>22</sup>。

水木は「ヤミ米の買い出し家」になり、「千葉の農家まで出かけて米を買い、東京へ持ってきて売ると、一回で五百円ばかりもうかる。その金で、新宿の闇市のオカラずしを食ったりするのだ。オカラずしというのは、オカラの上にタラヤイカをのせたものだ。安いのがとりえて、十円で十個だったから、五百円もあれば豪遊できた<sup>23</sup>」と、飢えて死ぬことはなかった。

この教授二十七歳時の邦訳書の恩恵に武良茂は浴したことになる。彼の愛読書（上中下）の発行年は昭和十五（一九四〇）年十一月・昭和十六年六月・九月だから、偶然に手に入りやすかったのか。偶然か故意か、彼にとって『ゲーテとの対話』が人生の決め手となっただけに、ゲーテと武良の間に赤い糸を感じる。

「読んでみると、はなはだ親しみやすく<sup>24</sup>」とあるのは、ゲーテの言語の明確さ、これを忠実に再現しているエッカーマンの功績もあるが、亀尾の母語と武良のそれが同じだったことにもある、かもしれない。

境港駅と米子駅を結ぶJR境線では水木の人気キャラクター鬼太郎の列車が運行されており、米子が始発、終着が境港というのも二人の関係を連想させる。JR境線の十六駅すべてにキャラクター名がついているが、始発米子駅が「ねずみ男」で、終着境港駅が「鬼太郎」というのも連想ゲームに拍車がかかる。ねずみ男は策士だったモデルが居らしいので亀尾ではないにしても、妖怪鬼太郎一家で唯一大学卒の肩書（妖怪大学怪奇学科卒で

あっても) 保持者であるところが興味津々だ。勿論「鬼太郎」は成功者水木自身であろう。

このネーミングは誰がしたのか。営業担当者か、水木自身なのか。また『對話』を手にした当時にすでに、亀尾英四郎が彼の同郷人だということを知っていたのか。知って、その本を選んだのか。そこが知りたい。

## 二 武良茂とヨハン・ペーター・エッカーマンの共通点

ふたりには共通点がある。両者とも幼少期を田舎で暮らし(エッカーマンの故郷は農村、武良の場合は漁村ではあるが)、正規の学校教育は十四歳まで、絵を描くことが大好きで絵描きがうまい、強い父親をもっていなかったことである。

相違点は、武良は比較的裕福な家庭に生まれ、教育ある両親に育てられているが<sup>25</sup>、エッカーマンは貧しい家庭に生まれ、教育のない両親の許で育ったこと。また武良は学問の好奇心をもっていなかったが、エッカーマンはその反対であった。

### (1) ふたりの幼少期

武良茂はゆたかでのんきな腕白少年時代を自然の中で過ごしているが、エッカーマンは家の百姓仕事の手伝いを通して自然と密接に生活している。もちろん時代の違いはあるが。一例を以下に挙げてみる。

エッカーマンの場合は彼の言葉を借りれば:「子どもの頃の活動を語るとすれば、それは季節によって異なっていた。春の到来とともに、また普通に起こるエルベ河の洪水で川水が堤防を越えたとき、私は堤防の縁や他の高台に打ち上げられたヨシやアシを拾い集めて、それを我が家の牛の最適な寝藁として蓄積するために、毎日、野に出かけた。また悠々と広がる牧草地に最初の緑が芽吹く頃、私は仲間の少年たちと一緒に一日中牛の見張り番をして過ごした。夏のあいだは、私は毎日私たちの畑を耕した。さらに竈の必需品を手に入れるために一年中、徒歩一時間ほどの辺りに広がっている森から、枯木を引きずってきた。収穫時には、ひとは何週間も野山で落穂ひろいをしている私を見かけた。やがて秋風が木々を揺さぶるころ、私はオークの実を集めて、それらを、エツツェ単位で、自分たちのガチョウのエサにするために買ってくれる裕福な住民たちに売った。私は十分大きくなると、村から村へ渡り歩いて行く父親に連れ立って、荷物運びを手伝った。この時期が私の少年時代の最も好きな思い出である。<sup>26</sup>」

武良の場合は「よく食べ、よく寝る子供だったから、ゆっくり朝寝坊した上、ゆっくり朝めしを食ってから学校へ行く。それで、一時間目の算数は、0点ばかりちょうだいした。しかし勉強以外では得意なことが多かった。だから、きわめて充実した少年時代を送ることができた。夏になれば、毎日が海水浴だったし、秋の運動会では常によき代表選手だった。趣味も多かったし、楽しみに欠くことはなかった。ケンカも強かったので、しだいにガキ大将の地位につくようにもなった。<sup>27</sup>」

絵を描く喜びでは、エッカーマンの場合は「煙草好きの父は煙草ひと包を持っていて、それが私の前に横たわっていた、包には馬のマークが描かれていた。その馬の絵は私には



非常に素晴らしい絵のように思えたので、そのうえペンとインキと一片の紙が手元にあったので、これを模写しようという抑えがたい衝動にかられた。両親に気づかれずに馬の模写に熱中しているあいだ、父はハンブルクのことを話し続けていた。書き終えたとき、私の模写はまるで手本そっくりだったので、私はこれまで味わったことのない幸福を感じた。両親に描き上げたものをみせた、両親は誇らしげに私をほめ、その絵を称讃した。私は嬉しさで興奮して、あまり眠れずに、その夜を過ごした。(中略) このときから、描写に目覚めた私の感覚は決して私を離さなかった。<sup>28</sup>」

武良の場合は「僕は絵が好きだった。紙切れとエンピツかクレヨンがあれば、いつも絵を描いていた。(中略) 小学校六年生の時、親父が油絵の道具を買ってくれた。それまでは、水彩絵の具だったから、本式の絵をやっているようでとてもうれしかった<sup>29</sup>」という具合である。

エッカーマンは、画家の大家のもとで学ぶ誘いを受けたが、両親も本人も、画家という職業を知らなかった。また才能を育むことのできる家庭環境ではなかった。

武良の環境はそれとは真逆だった。父親自身が趣味から映画館を開くほど、芸術を愛していたこともあり、学力のない息子の存在を受け入れ、絵描きへの道を支援した。

## (2) ゲーテに辿り着くまでのエッカーマン

知識欲旺盛の彼は教会支援を受けフランス語やラテン語や音楽を学んだが、ギムナジウム進学へは経済支援がなかったため、それはできなかった。また、老両親の扶養もあったので<sup>30</sup>、十六歳で故郷のヴィンゼン役所の書記としてはたらき、仕事を通してそれに関する知識や技術を学んだ。勤務地ヴィンゼンはフランス帝国に併合され消滅したので、一八一〇年から一八一二年までヴィンゼン、リュエネブルク、ユルツェンの役所の書記として勤めた。当時コザック軍が西に接近しつつあったので、これによってフランス支配から解放されると期待した彼は、一八一三年から一八一四年(二十一～二十二歳)まで「銃と革囊をもって義勇兵となり」、冬遠征に従軍した。この遠征中に特にオランダで絵画に触れ、彼の向上心は燃えた。一八一四年秋に義勇兵はハーメルンで解散になったので、ラムベルクに画家指導を仰ぎとう一八一五年冬に徒歩で四十時間の道のりを雪の積もる荒野を歩いてハノーヴァーまで行った<sup>31</sup>。そこでヴィンケルマンやメンクス、テオドール・ケルナーの詩集、それ以外の芸術家たちの作品にも触れた。友人ケルナー同様に「解放戦争を体験し、苦しい行軍、夜の露営、前哨勤務や戦闘状況を経験し、同じような思いもして<sup>32</sup>」いた彼は、ケルナーの『Laier und Schwert』(豎琴と剣)をまねて詩を描いた。それが好評だったので「感情と意欲と善意の備わった世界が生きいきと芽吹いている<sup>33</sup>」と自信をつけた。

シラーやクロップシュトックやゲーテの作品を読み、武良と同じように特にゲーテの詩を何度も読み「言葉にはあらわせない幸福を味わった<sup>34</sup>」。ゲーテの中に「私の見出したものは、あらゆる欲望や幸福や苦悩の中にある人間の心そのものであり、目の前にひろがる晴れわたった真昼そのままのドイツの自然であり、やさしく浄化した光につつまれた純一な現実だった<sup>35</sup>」と述懐している。

さらに翻訳物ではシェークスピアだけでなくソホクレスやホメロスも読んだ<sup>36</sup>。そのような高尚な文学作品から彼の理解できたことは、普遍的・人間的なものだけで、特別なものを理解するには、言語的観点からも、歴史的観点からも、一般的に大学教育や学校教育で培われる学術的な知識、また概して教養が必要であるということに、彼は気がついた。武良茂がファウストを何度読んでも分からなかったのも、まさにこの点に欠けていたからである。また周りの人びとからの助言により、いわゆる古典的教養がなくては言葉を巧みに力強く使用できるようにはならない、ましてや、内容面からも精神面からも、何かすぐれたものをつくりだせるようにはなれないと悟った<sup>37</sup>。

多くの著名人の伝記を読破することによって、学歴の重要性を痛感したので、彼は公務に就いていたが、並行してギムナジウムで勉強することにした（一八一七年 二十五歳）。しかし職業と学業の両立は難しく、すぐに退学した。

武良も住込み新聞配達の仕事の傍ら、ギムナジウムに入学したが、仕事と学校の両立は厳しく、中退している。

エッカーマンは、軍務局の計らいで——パンのための学問、つまり法律を学ぶことを前提条件として——研究助成金として年額一五〇ターレルを二年間もらい、一八二一年五月から一八二二年秋までゲッティンゲン大学で学んだ。しかし法学を専攻したのは一年間だけで、あとは文学に変更している。

同年九月一日に、彼は自作の『Erster Gedichtband』（初詩集）に献呈の言葉を付けてゲーテに送ったあと、九月三日から各地を旅行し、ドレーズデンからイエーナを経由して九月十八日にワイマールにゲーテを訪ねた。が、ゲーテは不在で会えなかった。

大学には三ゼメスターだけ在籍し、中途退学をした彼は、一八二二年秋にハノーヴァー近郊の田舎に引っ越して執筆活動を始めた。ここで、彼は『Beiträge zur Poesie mit besonderer Hinweisung auf Goethe』を詩作した。

その作品を金銭、しかも高額にしたかったので、今度も原稿をゲーテ宛に送った。今回はコッタ社への口添えを申し出た。エッカーマンの、ゲーテへの一方的な依頼である。

エッカーマンは個人的に近づきたい野心で、一八二三年五月末頃にハノーヴァーを出発して、今回も徒歩で、ゲッティンゲンとヴェラタールを経由してワイマールまで歩いた。前回のような失敗をしないために、原稿送付時（六月三日）にゲーテを自宅訪問する旨を伝え、訪問予約をしたのが六月九日、初対面が六月十日である。

### (3) ふたりの共通点

これまでの観察から、ふたりの共通点は、学識的には両者とも専門分野は文学でない、二人とも正確には高等教育を受けていない。だが、しっかり勤労している。仕事をしながら独学で勤しんでいる。そして、武良は戦争という時代のため、エッカーマンは貧困家庭のため、強い父親をしらない。

武良は出征すれば必ず死ぬという恐怖心克服のために試みた読書で偶然にゲーテに出会い、エッカーマンは作家の道確立するために意図的にゲーテに出あった。二人のゲーテとの出会いは同じでないにしても、ゲーテという人物が二人に与えた影響は大きかった。

ゲーテに触れたときの両者は人生経験乏しい二十代だった。エッカーマンは直接ゲーテから、武良は『ゲエテとの対話』で描写されているゲーテから、亀尾英四郎の邦訳を通して、多くを学び、勇気づけられた。人生とはこういうものであろうと知った。エッカーマンと武良茂にとってゲーテは父親の代理だった。

エッカーマンは人生における重要事項のほぼすべてをゲーテから指導してもらったといっても過言ではない。ゲーテの人脈を通して、多くの上流階級の人物たちと交流できるようにもなった。九年間の報酬としては余りあるものをエッカーマンに遺し、父親代理の役割を、ゲーテは見事に果たしている（後述）。

武良茂には「水木サン<sup>38</sup>の80パーセントはゲーテです」と、言わせるものを遺した。

### 三 代理の父親としてのゲーテ

水木しげるは『対話』を読んだときの感想として「ゲエテ本人が面白い<sup>38</sup>」ゲーテそのものが彼にとって興味があったと述べているが、これぞ「人間こそ人間にとって最も興味あるものである」というゲーテの言葉と同じである<sup>39</sup>。

『対話』のなかのゲーテは最も若い時で七十四歳、そこから八十三歳で死去するまでの九年間を父親の心境でエッカーマンに語っている。また、これを邦訳した亀尾もこれを親しみやすく感じた武良も、エッカーマンと同じ年頃の青年だった（後述）。そして三人ともに老ゲーテに父親像を感じていた。

「父親がたよりのなかったから“代理の父親”みたいな気持ちで愛読した<sup>40</sup>」だけでなく、武良は「ゲエテのような生活がしてみたかった<sup>41</sup>」のである。

「ゲーテとの対話」という語が強調されているが、そのあとに「in den letzten Jahren seines Lebens」が続く。したがって正式には「最晩年におけるゲーテとの対話」となる。

付加語が示すように、対話中のゲーテは悠々自適の年寄りである。そこには老人ゲーテとの、エッカーマンの繋がりが描写されている。最晩年のゲーテが、分かりやすく、具体的アドバイスと自信をもって、若い彼に道標を与えていて、老人の役目を果たそうとしているところもあるので、彼と同じ年頃の武良には父親のようで、親しみやすく、心強かったのは理解できる。亀尾も「この書は私にとっても精神上のたえざる養ひであり、又たえざる鏡であった<sup>42</sup>」と言っている。ふたりは同じような心境だった。翻訳した頃の年齢が似通っていたからであろう。

#### (1) ゲーテの言葉を暗唱し、赤線でアンダーラインを入れた武良

水木しげるにはゲーテの言葉を書き写し、赤線を引いて暗唱までした時期がある（既述）。戦後の貧しい時代、紙芝居作家や貸本作家として頑張れど実らなかった時代、描いても描いても全く売れず、極貧だった新婚生活には、「精神の意志の力で成功しない時には、好機の到来を待つほかない<sup>43</sup>」「人は努力している間は迷うに極まったものである<sup>44</sup>」を仕事部屋に張り付けていたのは有名である。そして「ひとかどのものを作るためには、自分もひとかどのものになることが必要だ<sup>45</sup>」「偉大なものは、ひたむきで、純心な、夢遊病者のような想像力によってのみ産み出される<sup>46</sup>」「重要なことは（中略）けっ

して使い尽くすことのない資本をつくることだ<sup>47</sup>』というゲーテの考え方を、自分のものとした。目の前にある事実を見据え、前向きに極難を切り抜け、自分の道を切り開いた。水木流の言葉で言えば「好きな道で奮闘して、食いきった<sup>48</sup>」。

水木しげるとなつてからは、教訓だけでなく、ゲーテの名前をうまく利用している。ファウストは何回読んでも分からなかったと言っているにもかかわらず、『悪魔くん』ではゲーテのファウストを活用したと言っている。中身を点検すると、そうとは言えないが。

悪魔と契約を結ぶとき自分の血液でもって署名するのは民話本でもゲーテでも同じである。水木しげるの悪魔くんのように血指での押印ではない。契約期間も『悪魔くん』の二ヶ月のように短くない。ゲーテの『ファウスト』では、ファウストが感激のあまりに「時よとまれ」というまでの無期限であり、民話本でさえ二十四年間である（実際はメフィストに騙され十二年になるが）。もちろん霊の呼び起こし方も違うし、悪魔くんには民話本やゲーテのような、真理追求の目的はない。『悪魔くん』に登場するメフィストまがいのものは民話中のもので、ゲーテ作品中のものでもない。

しかし、漫画家の空想と想像力によってうまくそれらを利用し、水木特有の別世界をつくりあげている。また水木しげるの得意芸の一つである「人名拝借」によって、『悪魔くん』に、中世から生き延びてきたファウスト博士を登場させている。『水木しげるの泉鏡花伝』『水木しげるの遠野物語』『猫楠 南方熊楠の生涯』『水木しげるの古代出雲』『鬼太郎国盗り物語』も、人名や地名をうまく利用している。苦勞した紙芝居作家時代の、人の気を引く術であろうか。

生きる姿勢はゲーテから学んだけれど、妖怪漫画作家としての世界は、ゲーテの教えに従って、自己の努力と粘り強さと才能で切り開いた。

## (2) ゲーテの言葉を教訓としなかったエッカーマン

エッカーマンはゲーテみずから聞いた言葉を水木ほど教訓として受け入れていない。老ゲーテを賛美することだけに心血を注ぎ、彼の言葉の真意を真剣には受けとめず、老人ゲーテの生活をまねるに終わった。結果的に彼は貧しさの中で死去してしまった。

エッカーマンはゲーテから結構多くのもを受けているのに、それらを発展させることができなかつたのは彼自身の資質にもある。

ゲーテはエッカーマンに仕事に見合うだけの金銭的報酬を与えなかつたという説もある。水木もどこかの箇所ですべて言っているが、それは金銭が優先される現在感覚からの評価であろう。

ゲーテは、独立作家として報酬を獲得する多くの機会を彼に世話している。エッカーマンのゲーテへの近付きは、詩人あるいは作家としてで、ゲーテに出版社に口添えしてもらって高額謝礼を手に入れようと考え、ゲーテに原稿を送ることから始まっている。事実、原稿を送る際に自らコッタ社を挙げ、推薦のことばを頼んでいる<sup>49</sup>。一八二三年五月にゲーテに原稿を送り、六月七日頃にワイマールに入り、九日にはゲーテに申し出て、十日にはゲーテを自宅に訪問している。

そのような意図で近づいてきたエッカーマンにある種の才能を認めたゲーテは、彼を作家あるいは詩人として迎え入れ、当日中にコッタ社に推薦状を書くこと、翌日には原稿を送ることを約束している。そして翌日十一日にはその夏中イエーナに滞在することを勧め、既にエッカーマンのために住居の手配も済ませていた。そして彼には、そこで作家として活躍するために様々な支援をもらえることを暗示している。六月十六日にはゲーテと仕事について話し合った彼は、その仕事を引き受けている。六月十九日には、ゲーテは、彼がイエーナで快適に過ごせるようにと知り合いに紹介状を書き、手渡した。二十一日にエッカーマンはイエーナに向けて出発、そこでは丁重に迎え入れられ、またコッタ社から、彼の原稿が本になるだけでなく、一年間は優に食べていける謝礼がもらえること、彼のイエーナ滞在中に出版されるという通知を受け取っている<sup>50</sup>。ゲーテは、この若い作家が彼の許で成長し、老いた自分を助けてくれることも期待して、例年行事であるマリエンバートに保養に出かける前に、住居の世話や人物たちの紹介と骨折っている。少なくとも一年間は生活できる謝礼を約束された彼は、この機会に新しいものを書き、作家として地固めしようと、勇気付いている。ゲーテはエッカーマンが夏の間につぎの詩を書くものと思ひながら、保養に立った。

また保養から帰ってきて三日後、九月十八日にゲーテが彼に夏中に詩を書かなかったのかと尋ねているのも、ゲーテの父性愛である。すこしは書いたがアイデアが大きく完成できなかったという彼に「大作をつくるのは用心しなさい。優れた才能があり、惜しみない努力をする最良の人たちが苦しんでいるのはまさにそれです。私もそれで苦しんだ、そしてそれがどんなに私の害になったか分かっている。すべてが水泡に帰したというわけではないが。私はうまくできることだけをすべてしていたならば、百冊だけでは足りなかっただろう<sup>51</sup>」と、構想が大きすぎて現実として書けていない彼に、現在にしがみつき現実を書くことを勧めている。構想が大きすぎると経験少ない若者はその中におぼれてしまって何も完成できないという忠告も与えているが、アウグスト・ハーゲンの作品を例にしてエッカーマンに注意を促すが、エッカーマンは、『芸術と古代』の中でゲーテはハーゲンに小さい素材を取り扱うよう忠告したのであろうと話をはぐらかし、忠告を聞き入れているようにはゲーテには思えないので、「もちろん私は忠告した。しかしひと一体全体われわれ老人のことを聞くだろうか。誰もが自分が一番よくそれを知っているにちがいないと思っている、それなのにいくらかの人は失敗する、そしていくらかの人は長くそのことについて思い違いをしなければならないのだ<sup>52</sup>」とエッカーマンに強く言っている。

水木はこの十八日にゲーテがエッカーマンに注意を促している或は教えている数々を、『ゲゲゲのゲーテ』中で教訓として挙げている。「誰でもそれを自分自身が一番よく知っていると思ひ込んでいる、それで多くの人が失敗をし、多くの人が長いこと迷わねばならない<sup>53</sup>」「若いうちは、物事の知識は何と言ってもまだ一面的だし、大作は多面性を要求する。そこで失敗するわけだ<sup>54</sup>」というように、人物で尊敬するのはゲーテだけだという水木は教訓としてこれらの言葉を真摯に受け止めた。

続けてゲーテは父親愛をもって「しかし今は迷っている時間はない、そのために我々老人はいるのだ。君たち若者が再び同じ道を歩むというなら、我々の模索と間違いは一体な

んだっただろうか<sup>55</sup>』と言い、「いつかは目標に通じる歩みを一步一步と運んでいくのでは足りない。その一步一步が目標なのだし、一步一步そのものが価値あるものでなければならない<sup>56</sup>』と並べ出したら切りのないほど数多くの言葉をエッカーマン青年に発している。

またゲーテの人脈でエッカーマンは一八二四年十月にはイギリス人たちにドイツ語授業を教えはじめている<sup>57</sup>（一八二四年十月）。一八二五年五月には執筆中の『Gespräche mit Goethe』をゲーテに見せ、読んでもらい（ゲーテ死後という条件付きで）出版許可をもらった。また同年十一月七日にはゲーテの推薦でイエーナ大学から名誉博士号を取得している。

名誉博士になったすぐあとで、カール・アウグスト大公の統治五十周年（一八二五年九月三日）記念に「一八二五年九月三日のワイマールの記念祝典」第一部を、二部を翌年三月末に書き上げているのも、これもゲーテの口添えで、作家としての恩恵を得ている。

一八二八年六月十四日にはゲーテの長年仕えたカール・アウグスト大公が死去して息子カール・フリードリヒが後継するが、この後継者の息子の、一八二二年以来フレデリック・ソレーという傳育係をおいているカール・アレクサンダー公子の英文学教師（一八二九年十二月）に、エッカーマンをさせたのも、カール・アウグスト皇太子の教師としてワイマールに呼ばれ、そこから発展していったゲーテであればこそできることで、ゲーテの父性愛だ。

そのうえゲーテは彼を未発表の『Nachlaßschriften』（遺作）の責任編集者とすることを遺言に付け足した。またフリードリヒ・ヴィルヘルム・リーマーと共にゲーテ全集を編集する仕事を彼に遺した。それは一八三九年から一八四〇年にかけて刊行されたゲーテ全集（全四十巻）となった。

そしてゲーテ死去の三週間前、一八三二年三月一日に、エッカーマンは市民権を手に入れた。ゲーテ家が三代かけて手に入れた市民権をエッカーマンは一代で手に入れた。これも死期を悟ったゲーテからの恩恵であろう。

ゲーテが生前中にエッカーマンの将来を見据えて為した厚意は、紙面の都合上、次回にまわすことにするが、ゲーテ死後に徐々に生じるエッカーマンの生活苦にもかかわらず、息子に最高教育を受けさせる経済支援も、自分のための温泉保養旅行も、日常の生活費までも、すべてはゲーテの人脈から、最高階級からの財的・人的支援によるものであったという数々の事実から、ゲーテがエッカーマンに対して十分な報酬を与えていないという諸説、また水木しげるの評価は的を射ていないといえる。

#### 四 親しみやすかったゲーテ

武良茂にとってゲーテが親しみやすかったのは、ドイツ人にとっても親しみやすかった事と同じ、つまりゲーテの言語と文章は単純明快で平易だからである。文章は簡潔でみじかい。ゲーテと同じような感覚、自然をながめ、感じ、たのしむ心という感受性がありさえすれば、誰にでもらくにたのしく読める。そういうところにドイツ人自身もゲーテに魅かれる。ゲルマン民族は古来より草や木や森を愛し、その中に神聖を感じ、安らぎを感じ

ている。これは『ゲルマニア』の中でタキトゥスも謳っている<sup>58</sup>。日本人武良のもっていた感覚もゲルマン人ゲーテの感覚も似通ったところがあるということである。

『若きウェルテル』は特にそうである。疾風怒涛時代を作りだした青年『ウェルテル』は実らない恋愛だけを吐露しているのではなく、自然をこよなく享受している。ウェルテルの草木や虫にまで愛情を傾ける純粋性や感受性にナポレオン・ボナパルトも魅かれ、レーニンも一九一七年の国外逃亡時『ファウスト』を携えていたほど、ゲーテ愛読者だった。

一見、ウェルテルは許嫁のいるロッテへの恋が実らず自殺したような錯覚に陥るが、ゲーテは感情や心情に流されうる青年期の若者熱・純粋性をウェルテルに凝縮している。昆虫や草花や土に這う小さな虫までも愛するあまり、踏み殺してしまう不安から歩くことにもとまどうほどに、自然を観察し享受する青年に、武良は自分を重ねたと告白している。

『若きウェルテルの悩み』は「二回か三回読み、住んでいた甲子園口あたりの景色を勝手になぞらえてあてはめ、空想の中でゲエテになって散歩して楽しんでた。以前はあの辺りは家も少なく、美しい景色だった。ただゲエテとちがって、恋人もいなかったし、あまり女にもてなかったから、女と口をきいたこともなかったのが、少々さびしい。それでも空想の散歩は楽しく、近くの別荘を見ると、これはシュタイン夫人の家、甲子園ホテルを見ると、これはワイマール公国大公夫人の家、などと考え、もはや、ワイマールが甲子園だか、甲子園がワイマールだかわからないほどだった。僕自身も小川を散歩する時は、完全にゲエテで、自分でも、僕なのかゲエテなのか定かでなかった<sup>59</sup>」と告白しているところが漫画家の才能を感じるようで面白い。

『ウェルテル』は、ゲーテがヴェッツラー郊外で開かれた舞踏会（一七七二年六月九日）で出会った少女シャルロッテ・ブッフへの悲恋を克服するために書き上げたもので、一方的な恋愛の相手にはすでに許嫁がいた。この書簡体小説は一七七四年九月に発行されており、ゲーテがカール・アウグスト公からの招請を受け、永住することになるワイマールに移ったのは一七七五年十一月なので、ウェルテルには「シュタイン夫人の家」も「ワイマール公国大公夫人の家」もまだ無縁なのであるが、しかし、これもそれも武良茂が多くこのゲーテ作品を読んでいたという証であり、ウェルテルとエッカーマンから語られるゲーテとが混在してゲーテ自身になり切っているところは、将来漫画家で大成する人間の想像力や空想力を感じさせる。ゲーテになり切っているから、すべての人物が同じ線上に登場するのであろう。

この頃の武良とウェルテル執筆当時のゲーテは似通った年齢であるから（既述）ゲエテになって空想しながらの散歩は楽しかったというのは、文学青年同士の気持ちは分かりあえたということか。ナポレオンは七回もウェルテルを読み、それをエジプト遠征にまで懐に入れていった話はあまりにも有名であるが、武良茂も同じように魅了された。

## おわりに

当時八十五歳の水木しげるが「ゲーテと聞くだけで、今でも背筋がしゃんと伸びるような気がします。（中略）偉ぶらないで自分のことは自分でやり、世の中を偏狹にはな

く幅広く見ていて、すなわちゲーテは賢いと感服したわけです<sup>60</sup>」と、日本経済新聞夕刊「こころの玉手箱」で述べているように、水木はゲーテ作品に影響を受けたというより、人間ゲーテに畏敬の念を抱いていた。だからゲーテに従った。

ゲーテという人物に憧憬し、その人間性に魅かれ、彼の言葉を教訓とし、それをしっかり守った。明日は死ぬかもしれない中で見つけ出した人物ゆえに、出征時にはゲーテの人間性がよくあらわれている『ゲーテとの対話』を雑嚢にいれ戦地にまで持っていったし、持って帰ってもきた。復員後のそれから大事な個所は抜粋して家の柱に張り付け、苦しい時代はゲーテの数々の言葉に励まされ、仕事にまい進した。ゲーテの考え方・生き方・人間的なものは吸収し、そして自らの才能と不休の努力によって自分の世界を築いた。

水木にとって、ゲーテは武良茂時代からの師匠であり、尊敬する人物だった。心中に留めおく秘像だった。だからゲーテの伝記をコミックにしないのかと尋ねられても、描こうと思った時もあったが、資料が多く、それらを読まなければならないことを理由にして、描かなかった。描いてしまえば偶像となる。それを避けたのかもしれない。

武良茂は出征、激戦地ラバウル（パプアニューギニア）では何度も死線を乗り越え、しかしマラリアにかかり、爆撃で左腕をなくし、それでも明るくラバウルの森では土着土人と友達になって、終戦とともに帰国した。

戦地に散った仲間たちや、戦争の愚かさ残忍さは幾冊も連載された『昭和史』や『白い旗』また『総員玉砕せよ!』の中で知ることができる。あれが、実際戦争をやった人間の描ける絵であり、事実であろう。戦争の残忍さを体験して、なお淡々と語る自分史にもゲーテの教訓が含まれている。

水木しげるの世界である。これについてはまたの機会に観察したい。

#### (Endnotes)

- 1 『ゲゲゲのゲーテ』水木しげる 双葉社 2015年12月初版 14頁1行・22頁7行
- 2 同上 17頁2-3行
- 3 『学生と読書』河合栄次郎編 日本評論社 昭和13年12月初版 昭和16年 8月58版
- 4 『ねぼけ人生』水木しげる、筑摩書房 2015年12月 76頁 6-10行
- 5 同上 76頁4行
- 6 第一哲学・第二倫理学・第三思想・第四社会思想・第五傳記・第六歴史・第七文学・第八隨筆紀行・第九經典宗教・第十科学から構成：『学生と読書』383-406頁
- 7 『学生と読書』407-437頁
- 8 同上：「読書の回顧」（高橋健二）245-259頁
- 9 同上：「如何に読書すべきか」（木村健康）167-186頁：重要な個所、感銘深い文字にアンダーラインを附することなどは有効である（183頁）
- 10 『ねぼけ人生』水木しげる 筑摩書房 2015年12月 74頁6行
- 11 同上 75頁13-14行
- 12 『ゲゲゲのゲーテ』14頁7-9行
- 13 同上 19頁6行
- 14 同上 18頁10行『ねぼけ人生』水木しげる 76頁12-13行
- 15 『戦争と読書』水木しげる 荒俣宏 2015年9月10日初版 17-65頁
- 16 『ゲゲゲのゲーテ』6頁10-11行



- 17 詳細には二十歳と七カ月
- 18 『Gespräche mit Goethe』 Johann Peter Eckermann Artemis-Verlag Zürich 1949 : kann es nicht fehlen, daß er mitunter an den Tod denke. Mich läßt dieser Gedanke in völliger Ruhe, denn ich habe die feste Überzeugung, daß unser Geist ein Wesen ist ganz unzerstörbarer Natur ; es ist ein fortwirkendes von Ewigkeit zu Ewigkeit. (2.Mai 1824) ; 115頁30-35行 : ひとも七十五歳になると、時どきは死を考える。死を考えても私はまったく平静だ。私は、われわれの精神は絶対に滅びることのない自然界の存在、つまり永遠から永遠に向かって生き続けていく存在だと、確信しているからだ。
- 19 同上 : Jeder Zustand, ja jeder Augenblick ist von unendlichem Wert, denn er ist der Repräsentant einer ganzen Ewigkeit (10.November 1823) ; 67頁1-3行 : どんな状態にも、どの瞬間にも、無限の価値がある。なぜなら、すべての瞬間は、それぞれが永遠そのものの代表だから。
- 20 『ゲーテとの対話』(上) 1968年11月初版・(中) 1968年12月初版・(下) 1969年3月初版
- 21 『ゲーテ対話の書』(上下) 神保光太郎 改造社 昭和11-12年
- 22 “闇を食はない”犠牲(中略) 東京高校ドイツ語教授亀尾英四郎氏の死である。(中略) 大東亜戦争が勃発して食糧が統制され、配給されるやうになった時、政府は『政府を信頼して買出しをするな。闇をするものは国賊だ』と国民に呼びかけた。同教授は政府のこの態度を尤もだと支持し、いやしくも教育家たるものは表裏があつてはならない。どんなに苦しくとも国策をしっかり守って行くといふ固い信念の下に生活を続けてみた。家庭には操夫人との間に東京高校文乙二年の長男利夫君以下、四歳の覚君まで六人の子を配給物で養つてみた。だが、庭に作った二坪の農園では如何ともすることが出来なかった。六人が三日間で食べる野菜の配給が葱(ねぎ)二本。發育盛りの子供たちに少しでも多く食はせんとする親心は、自己の食糧をさいて行くほかに方法はなかった。遂に八月末、同教授は病床にたふれた。近所に住むかつての教へ子の一人が最近にこのことを知って牛乳などを運んでみたが既に遅く、去る十一日、遂に教授は死んでしまった。(後略) (十月二十八日付毎日新聞) : 『勝田ヶ丘の人物誌』 275-276頁 (平成十二年七月七日発行、編集・勝田ヶ丘の人物誌編集委員会、発行・鳥取県立米子東高等学校創立百周年記念事業実行委員会 273-276頁)
- 23 『ねばけ人生』 125頁16行-126頁3行
- 24 同上 76頁6-7行
- 25 同上 15頁1行-18頁2行
- 26 『Gespräche mit Goethe』 16頁25行-17頁10行 : Soll ich nun von meiner kindlichen Tätigkeit reden, so war sie gleichfalls nach den Jahreszeiten verschieden. Mit dem anbrechenden Frühling und sowie die Gewässer der gewöhnlichen Elbüberschwemmungen verlaufen waren, ging ich täglich, um das an den Binnendeichen und sonstigen Erhöhungen angespülte Schilf zu sammeln und als eine beliebte Streu für unsere Kuh anzuhäufen. Wenn sodann auf der weitausgedehnten Weidefläche das erste Grün hervorkeimte, verlebte ich in Gemeinschaft mit anderen Knaben lange Tage im Hüten der Kühe. Während des Sommers war ich tätig in Bestellung unseres Ackers, auch schleppte ich für das Bedürfnis des Herdes das ganze Jahr hindurch aus der kaum eine Stunde entfernten Waldung trockenes Holz herbei. Zur Zeit der Kornernte sah man mich wochenlang in den Feldern mit Ährenlesen beschäftigt, und später, wenn die Herbstwinde die Bäume schüttelten, sammelte ich Eicheln, die ich metzenweise an wohlhabendere Einwohner, um ihre Gänse zu füttern, verkaufte. Sowie ich aber genugsam herangewachsen war, begleitete ich meinen Vater auf seinen Wanderungen von Dorf zu Dorf und half einen Bündel tragen. Diese Zeit gehört zu den liebsten Erinnerungen meiner Jugend.
- 27 『ねばけ人生』 37頁2-8行
- 28 『Gespräche mit Goethe』 17頁30行-18頁12行 : Da er gern rauchte, so hatte er sich ein Paket Tabak mitgebracht, das vor mir auf dem Tisch lag und als Wappen ein Pferd hatte. Dieses Pferd erschien mir als ein sehr gutes Bild, und da ich zugleich Feder und Tinte und ein

Stückchen Papier zur Hand hatte, so bemächtigte sich meiner ein unwiderstehlicher Trieb es nachzuzeichnen. Mein Vater fuhr fort von Hamburg zu erzählen, während ich, von den Eltern unbemerkt, mich ganz vertiefte im Zeichnen des Pferdes. Als ich fertig war, kam es mir vor, als sei meine Nachbildung dem Vorbilde vollkommen ähnlich, und ich genoß ein mir bisher unbekanntes Glück. Ich zeigte meinen Eltern, was ich gemacht hatte, die nicht umhin konnten mich zu rühmen und sich darüber zu wundern. Die Nacht verbrachte ich in freudiger Aufregung halb schlaflos, ich dachte beständig an mein gezeichnetes Pferd und erwartete mit Ungeduld den Morgen, um es wieder vor Augen zu nehmen und mich wieder daran zu erfreuen. Von dieser Zeit an verließ mich der einmal erwachte Trieb der sinnlichen Nachbildung nicht wieder.

- 29 『ねほけ人生』 41頁5-13行
- 30 『Gespräche mit Goethe』 19頁20行: -- es fehlte dazu nicht allein an allen Mitteln, sondern die gebieterische Not meiner Umstände verlangte auch, mich sehr bald in der Lage zu sehen, wo ich nicht allein für mich selber sorgen, sondern auch meinen dürftigen alten Eltern einigermaßen zu Hülfe zu kommen in stande wäre.
- 31 同上 22頁6-9行: Ich...machte mitten im Winter 1815 den fast viezigstündigen Weg durch die öde Heide bei tiefem Schnee einsam zu Fuß und erreichte...Hannover.
- 32 同上 24頁30-34行: ...daß ich gleich ihm den Befreiungskrieg mitgemacht und gleich ihm alle Zustände von beschwerlichen Märschen, nächtlichen Biwaks, Vorpostendienst und Gefechten erlebt und dabei ähnliche Gedanken und Epfindungen gehegt hatte.
- 33 同上 26頁4-5行: ...; es lebte in mir eine Welt von Gefühlen, Drang und gutem Willen; .....
- 34 同上 26頁13-15行: Ich las seine Lieder und las sie immer von neuem und genoß dabei ein Glück, das keine Worte schildern.
- 35 同上 26頁23-26行: ---; vielmehr fand ich das menschliche Herz in allen seinem Verlangen, Glück und Leiden, ich fand eine deutsche Natur wie der gegenwärtige helle Tage, eine reine Wirklichkeit in dem Lichte milder Verklärung.
- 36 同上 27頁15-18行: ich -- las in den besten Übersetzungen nicht allein die vorzüglichsten Stücke von Shakespeare, sondern auch den Sophokles und Homer.
- 37 同上 27頁19-31行: Hierbei merkte ich jedoch sehr bald, daß von diesen hohen Werken nur das Allgemeinmenschliche in mich eingehen wolle, daß aber das Verständnis des Besonderen, sowohl in sprachlicher als historischer Hinsicht, wissenschaftliche Kenntnisse und überhaupt eine Bildung voraussetze, wie sie gewöhnlich nur auf Schulen und Universitäten erlangt wird. Überdies machte man mir von manchen Seiten bemerklich, daß ich mich auf eigenem Wege vergebens abmühe und daß ohne eine sogenannte klassische Bildung nie ein Dichter dahin gelangen werde, sowohl seine eigene Sprache mit Geschick und Nachdruck zu gebrauchen, als auch überhaupt, dem Gehalt und Geiste nach, etwas Vorzügliches zu leisten.
- 38 『ねほけ人生』 76頁10行
- 39 『Wilhelm Meisters Wanderjahren oder die Entsagenden』 Johann Wolfgang von Goethe
- 40 『ねほけ人生』 76頁15行
- 41 同上 76頁16行
- 42 『ゲエテ對話の抄』 亀尾英四郎 岩波書店 昭和2年10月 6頁14行 『ゲエテとの對話』 亀尾英四郎 岩波書店 昭和15年11月 4頁17行
- 43 『ゲゲゲのゲーテ』 191頁5-6行
- 44 同上 192頁4-5行
- 45 同上 38頁2-3行
- 46 同上 54頁2-3行
- 47 同上 84頁2-3行
- 48 同上 169頁5行

- 49 『Gespräche mit Goethe』 36頁1-6行 : Im Mai 1823 war ich mit dieser Arbeit zustande. Es kam mir nun in meiner Lage nicht allein darauf an, einen guten Verleger, sondern auch ein gutes Honorar zu erhalten, und so entschloß ich mich kurz und schickte das Manuskript an Goethe und bat ihn um einige empfehlende Worte an Herrn von Cotta.
- 50 同上 43頁6-11行 : und überdies hatte ich bald die Freude, einen Brief von Herrn von Cotta zu erhalten, worin er sich nicht allein zum Verlage meines ihm zugegangenen Manuskriptes sehr bereit erklärte, sondern mir auch ein ansehnliches Honorar zusicherte und den Druck in Jena unter meinen Augen gesehen ließ.
- 51 同上 46頁34行-47頁6行 : Nehmen Sie sich in acht vor einer großen Arbeit. Das ist's eben, woran unsere Besten leiden, gerade diejenigen, in denen das meiste Talent und das tüchtigste Streben vorhanden. Ich habe auch daran gelitten und weiß, was es mir geschadet hat. Was ist da nicht alles in den Brunnen gefallen! Wenn ich alles gemacht hätte, was ich recht gut hätte machen können, es würden keine hundert Bände reichen. (18. September 1823)
- 52 同上 48頁4-8行 : Freilich habe ich das, aber tut man denn, was wir Alten sagen? Jeder glaubt, er müsse es doch selber am besten wissen, und dabei geht mancher verloren, und mancher hat lange daran zu irren.
- 53 『ゲゲゲのゲーテ』 127頁2-5行
- 54 同上 130頁2-5行
- 55 『Gespräche mit Goethe』 48頁8-11行 : Es ist aber jetzt keine Zeit mehr zum Irren, dazu sind wir Alten gewesen, und was hätte uns alle unser Suchen und Irren geholfen, wenn ihr jüngeren Leute wieder dieselbigen Wege laufen wolltet.
- 56 同上 48頁16-18行 : Es soll nicht genügen, daß man Schritte tue, die einst zum Ziele führen, sondern jeder Schritt soll Ziel sein und als Schritt gelten.
- 57 *Johann Peter Eckermann-biologische Daten : Johann Peter Eckermann* [www.johann-peter-eckermann.de](http://www.johann-peter-eckermann.de)
- 58 『ゲルマニア』 コルネリウス・タキトゥス著 泉井久之助 (改訳) 岩波文庫 1979年
- 59 『ねぼけ人生』 77頁11行-78頁1行
- 60 『ゲゲゲのゲーテ』 170-172頁 : 初出 2007年6月25日 日本経済新聞夕刊『こころの玉手箱』

#### 参考資料

- 1 『Gespräche mit Goethe』 Johann Peter Eckermann Artemis-Verlag Zürich 1949
- 2 『ゲゲゲのゲーテ』 水木しげる 双葉社 (双葉新書) 2015年12月初版
- 3 『学生と読書』 河合栄次郎編 日本評論社 昭和13年12月初版/昭和16年8月58版
- 4 『ねぼけ人生』 水木しげる 筑摩書房 (ちくま文庫) 2015年12月
- 5 『ゲーテとの対話』 (上中下) エッケルマン著 亀尾英四郎譯 岩波書店 (岩波文庫) 昭和15年11月 (上) 昭和16年6月 (中) 昭和16年9月 (下)
- 6 『勝田ヶ丘の人物誌』 編集・勝田ヶ丘の人物誌編集委員会 発行・鳥取県立米子東高等学校創立百周年記念事業実行委員会 平成十二年七月七日
- 7 『戦争と読書』 水木しげる 荒俣宏 KADOKAWA (角川新書) 2015年9月初版
- 8 『水木さんの幸福論』 水木しげる KADOKAWA (角川文庫) 2015年3月
- 9 『悪魔くん』 貸本漫画復刻版 KADOKAWA (角川文庫) 平成22年初版 平成27年12月再販発行
- 10 『水木しげる記念館』 公式ガイドブック2015年3月 朝日新聞・水木プロダクション
- 11 『ゲーテとの対話』 (上中下) エッカーマン著 山下肇訳 岩波書店 (岩波文庫) 2014年12月 (上) 2015年1月 (中) 2015年5月 (下)
- 12 『ゲルマニア』 コルネリウス・タキトゥス著 泉井久之助 (改訳) 岩波書店 (岩波文庫) 1979年
- 13 『総員玉砕せよ!』 水木しげる 講談社 (講談社文庫) 1995年
- 14 『コミック昭和史』 (1-8巻) 水木しげる 講談社 (講談社文庫) 1994年8月15日 (1)

国際研究論叢

1994年8月15日(2) 1994年9月(3) 1994年9月(4) 1994年10月(5) 1994年10月(6) 1994年11月(7)  
1994年11月(8)

15 *Johann Peter Eckermann* : [www.johann-peter-eckermann.de](http://www.johann-peter-eckermann.de)